

週刊センターニュース No.49



第 49 号 (2005 年 2 月 22 日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

第 2 回大学教育セミナー「学士課程教育の再構築について考える」が3月1日(火)に開催されます。詳細については、当センターホームページをご覧ください。

共同学習会のご案内

第 61 回 日時: 2月28日(月) 14:00 ~ 15:30

会場: 総合教育棟南棟 1 階 小会議室

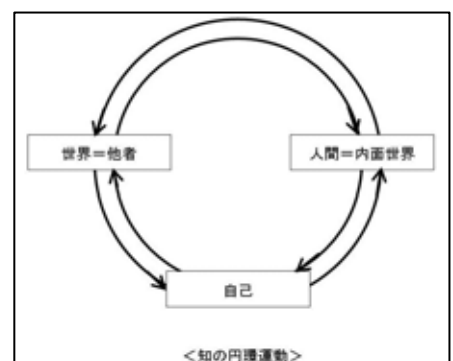
講師: 坂村 喜将 (学生支援課課長補佐 (就職担当))

題目: 「就職指導にかかる現状と将来展望」

大学教育学会 2004 年度課題研究集会参加報告 (その 1)

2004 年 12 月 4 日 (土)、5 日 (日) に立教大学で開催された大学教育学会 2004 年度課題研究集会に参加した。統一テーマは「大学の教育力とその社会的役割」であった。初日は東大名誉教授・共立女子大教授であり、芥川賞作家でもある柴田翔氏による基調講演があり、それに引き続き、シンポジウム I 「高校教育の多様化の進行と初年次教育・導入教育の課題」が行われた。二日目はシンポジウム II 「教学支援と大学改革 - FD、SD から PD (Professional Development) へ」、シンポジウム III 「教養教育の社会的役割と評価 - 「高等教育のグランドデザイン」議論を見据えて - 」が行われた。以下、基調講演ならびにシンポジウム I について簡単に報告させていただく。

柴田氏による基調講演は「現代教養教育の原点と貢献 - 社会が求めるものと大学が提供すべきもの - 」と題して行われた。東大独文 (私塾) から共立女子大文芸学部 (マスプロ大学) へ移った際の衝撃、そこで初めて「大学教育」と遭遇したことから始まり、「不本意入学 (偶然) であっても、卒業時には納得して卒業させることが大学および教師の仕事である (必然)」や、「人生や世界の「広さ、深さ、見通し難さ」への道標、教育目標として「感受能力としての文芸教養」があるのではないかと述べられた。また、「全入時代」に関しては、「かつては大学が学生を選び、今や学生が大学を選ぶ」と言われているのは誤りである。かつては、偏差値輪切りで学生が配給されていたのであり、大学は学生を選んでいなかった。現在も、大学が選ばれるのを待っているのではなく、大学として主体性、独自性を打ち出す旗印をあげ、「この指、とまれ! 」という姿勢が必要ではないか、「低学力の「ほどほど受験組」は自己脱皮願望が強く、彼らにこそ教養教育は必要である」などの発言があった。次に、以下のように「教養」の再定義が行われた。「これからは、戦後教養教育の理想である「知は力」から脱却し、「知は楽しい」を目指すべきである。「知は楽しい」とは、自己相対化であり、「今の自分」からの脱却であり、自分を壊して、新しい自分に出会えることが楽しいということを実感することである。「知は力」の時代は三分野 (自然科学、社会科学、人文科学) の学習をまんべんなく強要していたが、これは間違いであった。「世界を知り、人間を知り、自らを知れ! 」という知の円環運動 (図) において、駆動力のある知、運動するものとしての知を想定し、そこにおいて知が運動し、三分野のどこから入っても知の円環運動に乗れるようにするために教員は自己鍛錬が必要である。最後に、「危機こそが好機 (全入時代は危機だけでなく好機でもある)」という言葉で講演を締めくくられた。



引き続き行われたシンポジウム I は、以下の 4 氏による報告の後、ディスカッションが行われた。

- ・ 東京都立世田谷高校 杉森共和氏 「高校教育の多様化 ~ 高校現場からの報告 ~ 」
- ・ 立教新座中学校・高等学校 澁谷壽氏 「立教学院の一貫連携教育の理念が高等学校にもたらした

もの」

- ・ 関西国際大学 井上義和氏 「大学教育における第一世代問題の兆候 - 私立中下位3大学の調査結果から - 」
- ・ 関西国際大学 濱名篤氏 「新入生の適応と不適応はどのような経験から生まれるのか ~ 学習面と人間関係を中心に ~ 」

杉森氏は、東京都の高校制度改革について報告された。産業構造の変化による工業高校、商業高校の廃止（総合学科高校へ）、リーダー層を作るために進学に特化した高校設置、最底辺層向けのチャレンジスクール、昼夜間定時制単位制高校設置などが行われ、現在の高校教育は、カリキュラムだけでなく、その形態も多様化しているとのことであった。チャレンジスクールは、学ぶ意欲と熱意を評価する選抜形式（内申書、学力試験なし）を取り、中学不登校や高校中退の生徒を受け入れるための高校であり、朝・昼・夜3部制の単位制（一単位あたり1,200円。卒業に必要な79単位のうち32単位が選択科目）高校である。このように非常に間口を広げた高校であるが、大学への進学を希望する場合は、それなりに追加で積み上げが必要であるとのことであった。

澁谷氏は立教学院の小・中・高・大一貫連携教育体制構築の経緯について報告された。1980年代、立教小学校卒業生のうち30%前後しか立教大学へ入れない状況になっていた。このことを非常に重く見た理事会が「立教学院の一貫連携教育体制の確立」を目指して、一貫教育検討委員会を発足させ、小学校から大学までの2つの共通の教育目標「テーマを持って心理を探求する力を育てる」、「共に生きる力（共生力）を育てる」を定めた。この一貫連携教育体制が確立した結果、立教大学への付属校からの推薦のハードルが下がった（推薦率95%以上）。しかし、皮肉なことに、今度は、大学への推薦を高校生の学習の動機付けには使えなくなったそうである。連携の具体例としては、大学教員による高校授業（自由選択科目）、大学教員の研究領域紹介などを含めた進路指導、特別聴講制度（高校生が特別聴講生として大学の授業を履修。合格すれば高校の単位となり、立教大学入学後は、大学の単位にもなる。）英語教育連絡会（小・中・高・大の英語教育に関する連絡会）、勤務員研修制度（小中高教員が大学・大学院の授業履修）などがあげられる。また、高校では、「豊かでの確かな日本語を使う能力」を育成するために、卒業研究論文を卒業要件として課し、優秀な論文はきちんと製本されることになっている。

井上氏の報告は、大都市近郊の文系学部を対象として、両親の学歴、本人の高校時代の成績と大学への適応の相関関係についての調査報告であった。この報告で、初めて、両親が大学を卒業していない「大学第一世代(First Generation Student)」という語があることを知り驚いた。この「大学第一世代」は、大学大衆化が日本より進んでいるアメリカにおいて1990年代から、大学入学後の様々な格差を規定する重要な要因と認識されているとのことであった。「大学第一世代」は両親ともに大卒の学歴を持つ「第二世代」と比較すると大学生活への適応や教育達成に困難を持つ傾向があることがわかっているとのことであった。今回報告された日本の3大学の調査（入学後半年間）では、「第一世代」、「第二世代」だけでなく、高校時代の成績も考慮して、以下のような点が指摘された。

- ・ 4月時点、高校成績上位グループにおいて、「第一世代」は授業志向、「第二世代」はサークル志向
- ・ 4月時点、「第一世代」は授業を難しく感じる比率が高く、「第二世代」高校成績下位グループほど、授業を退屈に感じる比率が高い
- ・ 10月時点、「第一世代」高校成績上位グループは学習面で7割以上が成功しているが、「第一世代」高校成績下位グループは6割弱が失敗している
- ・ 10月時点、「第二世代」高校成績上位グループで対人関係が「高校時代はうまくいったのに大学ではうまくいかない」比率が高い

濱名氏の報告では、高校と大学の関係は「連携」（両者の関係の連続性を前提とした概念）か「接続」（非連続なものを繋ぐという含意）かという話から始まり、新入生の学習面と対人関係での適応について、入学後半年でどのように変化したのかについて報告がなされた。具体的なデータを示しての説明の後、「学習面での適応 - 不適応の分化は4月段階から始まっている、4月段階で「入学して良かった」「大学生活への期待」などの感情をいかに喚起できるかが重要、対人関係での適応と学習面での適応には非常に強い相関関係がある、学習面と人間関係づくりを4月段階でいかにサポートしていくかが最も重要である」とのまとめが示された。この内容を受けて、関西国際大学では、「教職員・学生が一冊の同じ本を読む（共同体験）、アドベンチャープログラム（一緒に共同作業を行う）などによる集団づくり」、「学科毎のガイダンスではなく、クラス担任が20~30名向けに全学の説明を行う」といった取り組みを大学全体としてのFDと位置付け、行っているとのことであった。

シンポジウムIIおよびIIIについては、また別の機会に報告させていただく。（文責 堀井）